豊田市美術館と学校との連携事業
―「美術館学習」(1996-2008年度)について

都筑正敏

1. はじめに

豊田市美術館は1995年11月の開館以来、学校現場とのパートナーシップを徐々に築き上げながら、鑑賞教育の推進に力を入れてきた。鑑賞をテーマとする研究授業のサポートをはじめ、市内小中学校の教諭を対象とした図工・美術科に係る多様な研修会の支援[1]、新任教諭のための美術館研修の開催など、学校の先生方との連携は年々広がりを見せている。

また、同時に取り組んできたのが、小中学生と美術館を繋ぐための学校との連携事業である。豊田市は、美術館のオープンにあわせて「美術館学習」という新しい事業をスタートさせた。美術館学習とは、毎年、市内の小中学生それぞれ一学年全員を美術館に招き、児童生徒が公共施設としての美術館について学ぶ場とするとともに、展覧会の鑑賞を通じて優れた生のアートと出会うことができる機会を用意したものである。豊田市教育委員会の要請によって始まり、学校と美術館の協力体制のもとで実現したこの美術館学習は、後に美術館の積極的な活用が明示されることになる新しい学習指導要領(1998年度告示)に先んじる試みであり、全国的にみても類例の少ない、鑑賞教育における画期的な実践となったのである。

本稿ではこの「美術館学習」について、事業がスタートした1996年度から、学習の支援プログラムが整備されて継続事業として軌道に乗り展開していた2008年度までを一つの区切りとし、その経緯の概略をまとめ、意義と課題について報告する。

[1]豊田市図工・美術科夏季実技研修会、豊田市教員免許状更新講習など

2.「美術館学習(1996～2008年度)」の経緯

愛知県北東部に位置する豊田市は、美術館学習を導入した1996年当時、人口約35万人の中核市であった。トヨタ自動車が本社を置く企業城下町として知られているこの都市には、市内52の小学校と20の中学校があり、およそ37,000人の児童生徒が在籍していた[2]。豊田市の教育委員会は、市美術館のオープンを契機に、小中学校における「公共施設体験学習」の一環として美術館学習をスタートさせることを決定する。その前年まで、市内の小中学生が公共施設体験学習の場として訪れていたのは、市のごみ処理施設や浄水場、防災学習センター、プラネタリウムを目玉とする「とよた科学体験館」などの施設であった。これを、美術館学習の導入に伴い、環境や防災に関わる公共施設へは小学4年生時に、とよた科学体験館と美術館へは2つの館をセットにして小学6年生時と中学2年生時に訪問するよう調整し、学校行事として位置づけたのである[3]。毎年、この体験学習の機会に美術館を訪れる児童生徒の数は約8,300人[4]。愛知県下で最大の面積を持つ豊田市の各学区(図1,2)から小中学生たちが学校の学年単位で、遠いところは片道60分かけて送迎バスに乗り、4ヶ月間に渡って引っ切

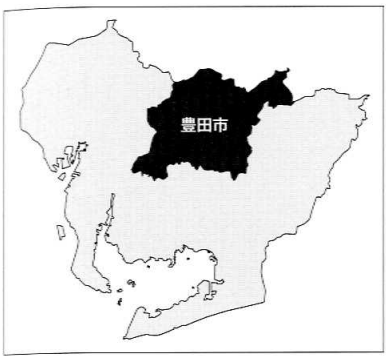


図1　愛知県豊田市位置図

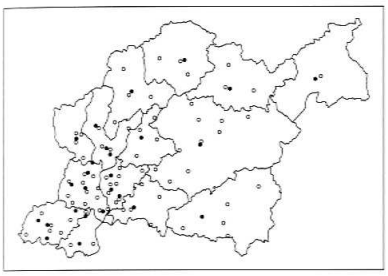
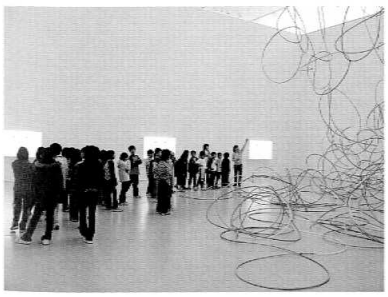


図2　豊田市小中学校分布図（○…小学校 ●…中学校）



りなしに美術館へやってくるのだ。全国の小中学校における校外学習の状況について詳しく調査をしていないが、1996年当時、これほどの規模で継続的に美術館での学習を奨励する自治体としての取り組みはかなり珍しいものであったといえるだろう[5]。こうした学習支援の背景には、文化施設を活用した本物の芸術体験を通じて、子どもの豊かな感性の育成を目指そうとする、豊田市の教育行政方針[6]がある。そして何よりも校外学習の交通手段をバックアップする当時の市の豊かな財政力があってのことといえよう。豊田市の学校教育では、「美術館学習」の他、中学3年生を対象とした「心に残る記念事業−豊田市中学生のためのコンサート」[7]や、中学1年生を対象とする「能楽鑑賞教室」[8]がそれぞれ夏休み期間中に学校行事化されており、子どもたちに質の高い生の芸術を体験させる校外学習の取り組みが目白押しなのである。

美術館学習の導入によって、豊田市の小中学生は義務教育の期間中に必ず2回（小学6年時と中学2年時）、美術館を訪れる機会が与えられた。美術館での体験をより奥行きのあるものにするために、これは美術教育の立場からすると願ってもない学習プログラムといえる。とはいえ、毎年約8,300人もの児童生徒を美術館へ招待して学習する事業を軌道に乗せる道程は決して順調なものではなかった。先ずはここで美術館学習の基本的な流れを説明しておこう。

市教育委員会の学事課の担当者は、各小中学校に学習希望日を打診し、来館スケジュールを決定する。この校外学習では先述のとおり、美術館ととよた科学体験館の2館が組み合わされているため、午前に美術館を訪れる学校は午後に科学体験館へ、逆に午前に科学体験館を見学した学校は午後に美術館を訪問するよう1日の予定が組まれることになる。このスケジュールに従って送迎バスが手配されるのである。来館する日程と送迎の段取りが決まれば、実務のバトンは美術館へと受け継がれ、子どもたちが来館してからの現場の運営はすべて美術館に任される。美術館に到着した児童生徒の滞在時間は概ね1時間30分。最初に講堂へ入場してガイダンス（20分）を受けた後、クラス単位で展示室を巡る。子どもたちが鑑賞する展示内容は、当初常設展のみに限られていたが、2001年に豊田市美術館条例の改正が行われ、小中学生の企画展観覧料が無料化となるに伴い、常設展と企画展の両方を観覧できるよう拡大された。先導役の担任教諭には、館内を巡る幾つかのルートが示された地図が用意されていて、クラスごとに動線が重ならないように配慮をお願いしている。約60分かけて美術館の観覧エリアを一巡したところで再び講堂に入場。最後に学習全体の総括（10分）を終えたら送迎バスへ乗車する、というのがこの美術館学習の一連の流れである。

美術館学習の導入時、美術館側の主担当は学芸課の教育普及担当1名（学芸員／筆者）と庶務課1名（主事）であり、学芸課の担当学芸員は活動の大枠を定めて現場の運営管理を行い、庶務課職員は学校との連絡調整を担っていた。ただし、小中学校72校の実際の受け入れに関してまで、一部の職員で担うには負担が掛かりすぎることは明白である。したがって、学芸課、庶務課の所属に関係なく管理職を除いたすべ

ての職員11名で学校単位の担当者を決定し、子どもたちが来館した際に講堂で実施するガイダンスから退館するまでを一括して受け持つよう分担した。いずれにせよこの美術館学習の滑り出しは、開館1年目という慌しさも相まって、子どもたちの鑑賞体験に対するケアも整わぬままスタートしており、美術館側の受け入れ態勢に不十分な面があったであろうことは否めない。この事業は、やがて豊田市美術館に「作品ガイドボランティア」[9]が結成され、活動を拡充していくなかで美術館学習をバックアップする体制が整い、ギャラリートークや出張授業といったプログラムが整備されていくことによって、ようやく質の高い継続事業として軌道にのり、安定した運営を迎えていく。

[2]2005年4月1日、豊田加茂7市町村の合併により、小学校数は52校→79校、中学校数は20校→27校になる。2013年1月現在の学校数は、小学校74校、中学校27校である。

[3]2002年度より、とよた科学館と美術館を訪れる学年は、小学4年と中学3年へと変更される。

[4]1996～2008年度までに来館した児童生徒数の平均

[5]世田谷美術館は1986年の開館以来、区立小学校（64校）の全4年生を対象とした「鑑賞教室」を実施。横浜美術館（1989年開館）や浜田市世界こども美術館（1996年開館）では、市内小学校と幼稚園と連携して創作と鑑賞を組み合わせたプログラムを展開している。また、金沢21世紀美術館では2006年より、市内小学校（63校）の全4年生を対象とした「ミュージアム・クルーズ」を開催している。

[6]豊田市教育行政方針（1996年度）および豊田市教育行政計画（2003年度）による。いずれも豊田市教育委員会策定

[7]中学生にクラシック音楽に触れてもらうことを目的として、1989年度より市内コンサートホールで東京／名古屋フィルハーモニー交響楽団等による演奏会を毎年夏休み期間中に開催している。

[8]1998年11月の豊田市能楽堂のオープン以来、豊田市の中学1年生を対象に日本の伝統芸能に親しんでもらうことを目的として毎年夏休み期間中に開催している。

[9]豊田市美術館のガイドボランティアは1996年に結成。対話型ギャラリートークの実践を軸に、アートを観ることの楽しさや意味を観客が見出すことができるようサポートする活動を行っている。2013年1月時点の活動は、木曜日を除く毎日午後2時から／土、日、祝日は午前11時と午後2時から、ともに約1時間のスケジュールでギャラリーツアーを開催している。ガイドボランティアの活動については『美術館とガイドボランティア10周年記念誌–観る人がいなければアートは存在しない！』（豊田市美術館 2008年発行）に詳しい。

美術館学習の実績

年　度	来館児童・生徒数	来館学年
1996/H8	8,355	小6、中2
1997/H9	8,560	小6、中2
1998/H10	8,177	小6、中2
1999/H11	8,016	小6、中2
2000/H12	7,551	小6、中2
2001/H13	11,123	小4、5、6
2002/H14	7,228	小4、中3
2003/H15	7,562	小4、中3
2004/H16	7,228	小4、中3
2005/H17	8,472	小4、中3
2006/H18	8,531	小4、中3
2007/H19	とよた科学体験館改修工事のため中止	
2008/H20	8,633	小4、中3
計	99,436	

年間スケジュール

	教育委員会学事課 ⟷ 学校	美術館 ⟷ 学校
1月	○市内小中学校へ学習希望日時の打診	
2月	↓	
3月	各学校に日程通知	
4月		
5月	○市内小中学校へ学習計画書の作成依頼	
	○送迎バスの手配	○手引書の編集
6月	↓	
7月	学習計画書の提出 →	来館スケジュールが提出される
	手引書の印刷 ←	○出張授業の希望調査(2000年〜)
8月	↓	↓ 出張授業案作成
9月	手引書の配布	出張授業スタート
10月		○美術館学習スタート
11月		
12月		
1月		
2月		

1日のスケジュール(90分)

午前の部	午後の部	
09:50	12:50	送迎バスにて美術館到着
↓	↓	
10:00	13:00	講堂へ入場
		美術館紹介ビデオ(13分)を視聴
↓	↓	展覧会概要説明、諸注意
10:20	13:20	クラス単位で展覧会を鑑賞(約60分)
↓	↓	所定の作品の前でガイドボランティアによるギャラリートーク(15〜20分)に参加
11:20	14:20	講堂に集合、まとめ
↓	↓	点呼後移動
11:30	14:30	送迎バスにて出発

平成20/2008年度　美術館学習日程

10　月			
日	曜	午　前	午　後
1	水		
2	木		
3	金		
4	土		
5	日		
6	月		
7	火		
8	水		猿投中(93)
9	木	高嶺小(122)	
10	金		
11	土		
12	日		
13	月		
14	火		
15	水	挙母小(130)	九久平小(38)
16	木		
17	金		
18	土		
19	日		
20	月		
21	火	逢妻中B(155)	逢妻中A(126)
22	水	滝脇・豊松(13)	若園中(141)
23	木	東保見小(85)	寺部小(46)
24	金		稲武小(20)
25	土		
26	日		
27	月		
28	火	前山小B(84)	前山小A(87)
29	水	大畑小(21)	寿恵野小(104)
30	木		井上小(97)
31	金	山之手小(126)	追分・冷田(22)

11　月			
日	曜	午　前	午　後
1	土		
2	日		
3	月		
4	火	保見中(145)	足助中(81)
5	水	藤岡中B(129)	藤岡中A(167)
6	木	梅坪台中B(120)	梅坪台中A(119)
7	金	巴ヶ丘小(15)	旭中(32)
8	土		
9	日		
10	月		
11	火	前林中B(117)	前林中A(116)
12	水	美里中A(115)	美里中B(115)
13	木	石野中(45)	井郷中(162)
14	金	上郷中B(86)	上郷中A(122)
15	土		
16	日		
17	月		
18	火	竹村小(117)	元城小(41)
19	水	東山小(97)	
20	木	古瀬間小(65)	若園小(131)
21	金	青木小(119)	
22	土		
23	日		
24	月		
25	火		
26	水		
27	木	豊南中A(112)	豊南中B(148)
28	金	稲武中(31)	松平中(144)
29	土		
30	日		

12　月			
日	曜	午　前	午　後
1	月		
2	火		猿投台中(117)
3	水	崇化館中B(117)	崇化館中A(117)
4	木	末野原中B(116)	末野原中A(155)
5	金		益富中(120)
6	土		
7	日		
8	月		
9	火	朝日小(96)	新盛・大蔵・御蔵(33)
10	水	小清水小B(83)	小清水小A(82)
11	木	美山小(143)	
12	金	若林東小(103)	
13	土		
14	日		
15	月		
16	火	高岡中B(80)	高岡中A(80)
17	水		
18	木	朝日丘中B(122)	朝日丘中A(122)
19	金	足助・萩野・明和(43)	五ヶ丘小(38)
20	土		
21	日		
22	月		
23	火		
24	水		
25	木		
26	金		
27	土		
28	日		
29	月		
30	火		
31	水		

1　月			
日	曜	午　前	午　後
1	木		
2	金		
3	土		
4	日		
5	月		
6	火		
7	水		
8	木	高橋中B(143)	高橋中A(145)
9	金		下山中(92)
10	土		
11	日		
12	月		
13	火	大林小(130)	根川小(81)
14	水	広川台小(68)	
15	木		小原連合(36)飯部(67)
16	金	駒場小(91)	築羽・敷島・小渡(29)
17	土		
18	日		
19	月		
20	火	西保見小(38)	幸海小(61)
21	水		飯野小(130)
22	木	五ヶ丘東小(15)	衣丘小(77)
23	金	岩倉小(42)	東広瀬・西広瀬・中金・上郷見・藤沢(57)
24	土		
25	日		
26	月		
27	火		大沼小(20)・御作小(17)
28	水	若林西小(63)	土橋小(65)
29	木		佐切・則定・矢並(25)
30	金	加納小(52)	一木小(113)
31	土		

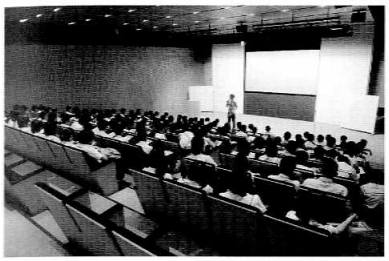
2　月			
日	曜	午　前	午　後
1	日		
2	月		
3	火		野見小(93)
4	水		石畳小(41)
5	木	四郷小(54)	中山小(95)
6	金	浄水小(87)	平井小(83)
7	土		
8	日		
9	月		
10	火		小原中(52)
11	水		
12	木	平和小(59)	伊保小(40)
13	金	梅坪小B(117)	梅坪小A(76)
14	土		
15	日		
16	月		
17	火		
18	水	堤小B(102)	堤小A(102)
19	木	竜神中B(110)	竜神中A(146)
20	金		
21	土		
22	日		
23	月		
24	火	花山小(16)	
25	水		
26	木		
27	金		
28	土		

3　月			
日	曜	午　前	午　後
1	日		
2	月		
3	火		童子山小(115)

( )内は人数
・・・休校日
・・・休館日

3. 美術館学習のサポート事業

子どもたちと美術館を繋ぎ、質の高い"生"の芸術に直接触れる機会を設けること。教育現場においては、何よりもこの取り組み自体に意義があり、大きな成果であることは言うまでもない。しかし、子どもたちをただ美術館に招待して、自由に鑑賞させるだけでは高い学習効果は望めないだろう。以下、この美術館学習の機会をより充実したものとするための学習支援の試みを紹介する。



ガイダンス

○美術館紹介ビデオ

子どもたちが来館して最初に講堂で実施するガイダンスでは、「美術館紹介ビデオ」を放映している。このビデオは当初、一般の観客に対して当館の概要を紹介する目的で制作した番組が使用されていたが、2003年度より美術館学習に参加する小中学生向けに制作した新しい番組へと変更され、2008年度にはさらに内容が一部、リニューアルされた。展示室に入る前に行うガイダンスにおいて、まったく口頭の話だけというのでは児童生徒の関心が散りやすい。この点、映像は視聴者にイメージを実感的に分かりやすく伝え、効果がすぐに反映される訴求効果の高いツールである。美術館の仕組みと利用の仕方が明快に纏められたこの番組は、初めて美術館を訪れた子どもたちにとって重要なガイドラインとなった。なお、最新の美術館紹介ビデオ(13分)の筋立ては以下のとおりである。

1. 美術館の沿革、2. 建築(家)、3. 収集方針、4. 作品の保存、5. 展示作業、6. 温室度調光システム、7. 作品修復、8. 学芸員の調査研究活動、9. キャプションの見方、10. 常設展と企画展、11. 作品の監視・警備、12. 教育普及活動(講演会、ワークショップ、配布用ガイド、カタログ、ガイドボランティア、パフォーマンス・コンサート)、13.(図書閲覧室、A.V.ブース、ミュージアムショップ、レストラン、茶室)、14. 鑑賞にあたっての注意

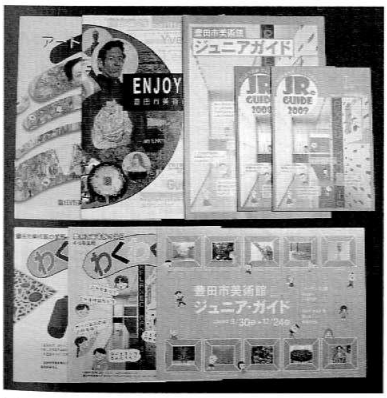


図3

○美術館学習の手引き(セルフガイド)

「美術館学習の手引き」(図3)は、美術館を訪れる子どもたちにとっての鑑賞のヒント、手引きとなる情報を与える教材として、教育委員会学事課の予算のもと制作が始まった。1997年10月、市教育委員会から任命された図工美術の担当教諭8名と美術館の担当学芸員1名による「美術館学習の手引き」編集委員会が発足。1998年8月まで6回の編集・校正会議が実施されて、小学6年生向けは4〜5点の作品に絞ったワークシート形式の三つ折リーフレット、中学2年生向けは幅広い作品の概要を端的に解説するブックレット形式で制作が進められた。この手引書は、来館前に対象となる小中学生全員に配布されるもので、どのように使用するかは各学校の指導教諭に一任されている。

最初の編集委員会の発足時に、この手引書は原則として3年に1回、内容の改定を

行うという取り決めが成され、その都度、編集委員が召集されることになった。これは編集委員を任される先生方の業務の忙しさを鑑みての申し合わせであった。しかし、一度制作したら3年間の学習の使用に耐える内容にするため、掲載作品は自ずと美術館の主要な所蔵作品に限定されていき、年間4回展示替えが行われる美術館の多彩な展示内容をタイムリーに反映させることができないという問題を抱えることになった。また、編集委員の先生方が図工美術の専任であったとしても、展覧会や個々の作品についての情報は有していないため、どうしても美術館からの詳しいインフォメーションがなければ手引書の編集に向けてまったく身動きがとれないという状況も多々見受けられた。こうしたことから、2006年以降は編集委員の召集は見送られ、美術館の教育普及担当の学芸員が手引書の内容の編集校正を行い、教育委員会学事課が印刷を業者へ委託する業務を担うことになった。

平成20/2008年度　美術館学習の手引き（セルフガイド）

ギャラリートーク風景

ギャラリートーク風景

○ギャラリートーク

作品を前にして参加者の反応を見ながらガイドを展開するギャラリートークは、子どもたちの興味、関心に応じて鑑賞を支援することができる有効な教育プログラムである。

1998年度より、豊田市美術館の作品ガイドボランティアは、一般来館者を対象とする日常的なギャラリーツアーの活動に加えて、美術館学習で来館する小中学生に対してもガイド活動を展開していくことになった。1998〜1999年度は、学校のクラスごとに1名のガイドボランティアが付き、一緒に館内を巡るツアー形式をとっていたが、小中学校あわせて年間約320組のクラスを20名ほどのガイドボランティアで分担して案内することは、活動スケジュールを調整する段階で無理が生じた。このため、2000年度からはガイドボランティアが常設展示室で子どもたちを待ちうけ、特定の作品の前でギャラリートークを行うことになった。この場合、トークのスタイルは、単なる一方通行的な作品解説ではなく、作品を題材にした子どもたちとの「対話」を重視するものとし、時間は1クラス15〜20分、取り上げる作品は1作品（テーマを設けてトークをする場合は2〜3作品）とした。トークのための作品の選定は、親しみやすさ、物語性、子どもたちの多様な感情や思考を促すかなどの観点から教育担当学芸員が行い、トーク全体の組み立ては、教育担当学芸員が作成したトークプランをもとに、ガイドボランティア全員が参加する定例会や研修会にて検討が行われ、基本となるトークの流れがボランティア全員に共有されていった。こうして実際に執り行われたギャラリートークのあらましと反省点は、トーカー役のボランティアによって毎回所定の記録用紙に記入され、さらにトークの問題点や改善点についてはボランティアの定例会にて協議が行われた。

ところで、ここでの対話型のギャラリートークは、それに参加した児童生徒らと作品を介した言葉のキャッチボールを行うものであるが、この対話型トークを小中学校のクラス単位で何回も実施していると、非常に興味深いものが見えてくる。それは、その学級が普段どのように機能しているのか、ということがあからさまに浮かび上がってくるのである。例えば、そのクラスの子どもたちは、一人一人が学ぶ意欲を持っているか、自分の意見や気持ちを自由に発言できる学習環境にあるのか、あるいは、他者の話に耳を傾け、共感することができるか、――というような、その学級の実態やムードが明瞭に見えてくるのである。それは普段の学校生活における、学級運営の現状といえるものだろう。対話型のギャラリートークは、その学級の見えない本質をも浮き彫りにしてしまうのである。

□ギャラリートークで題材とした主な収蔵作品

・クリスチャン・ボルタンスキー《聖遺物箱》1990年　写真、電球、ビスケット缶ほか
・ルネ・マグリット《無謀な企て》1928年　油彩、カンヴァス
・フランシス・ベーコン《スフィンクス》1954年　油彩、カンヴァス

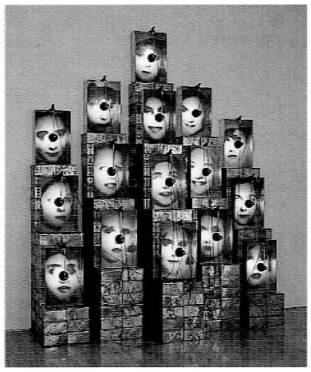
・アルベルト・ブッリ《赤　プラスチック》1964年　画布にプラスチック、燃焼
・コンスタンティン・ブランクーシ《雄鶏》1924年（1972年鋳造）　ブロンズ
・中原浩大《無題（レゴモンスター）》1990　レゴブロック
・河原温《Todayシリーズより》1971年、アクリル、カンヴァス、新聞紙、厚紙
・金昌烈《水滴》1978年　油彩、カンヴァス
・猪熊弦一郎《美しき地下天国》1977年　アクリル、カンヴァス
・李禹煥《線より》1981年　膠彩、カンヴァス
・白髪一雄《無題》1959年　油彩、カンヴァス
・大岩オスカール《エイジアン・ドラゴン》1995年　アクリル、合板

平成20年度/2008年度版

美術館学習　ギャラリートークの想定例

作品：　クリスチャン・ボルタンスキー《聖遺物箱（プーリムの祭り）》1990年
写真、電球、電線、ビスケット缶、網
対象：　小学生高学年〜中学生
時間：　約20分
目的：　作品をよく観察し、見たこと感じたこと考えたことを語り合うこと。

トークプラン：（T：トーカー／A：参加者）
T：今から少し時間を取るので、この作品をじっくり観察してください。
T：それでは作品の前に座ってください。
T：この作品を見て、最初にどんな感じがしましたか？
A：さまざまな答え（怖い／お葬式／お化け屋敷／お墓のよう／ぞっとする／気味がわるい）
T：それはどこを見てそう感じたの？
A：さまざまな答え
T：この作品がどんなものでできているのか、教えてくれるかな。
A：銀色の缶、白黒の顔写真、電球、電線、網
T：そうですね、ブリキ製（薄い鉄）の箱が、山のように階段状に積まれていて、
そのひとつひとつの段の上に、箱に入った顔の写真が電球によって照らし出されています。
T：では、この写真の人たちは、どんな人たちだろう？
A：さまざまな答え（わたしたちと同じくらいの年齢の子どもたち／外国の子どもたち／何十年も前に撮られた子どもたち／すでに死んでしまった子どもたち／戦争で亡くなった子どもたち・・・）
T：それはどこを見てそう感じたの？
A：さまざまな答え（白黒だから／金髪だから／お化けみたいだから／お葬式みたいだから・・・）
T：この写真の子どもたちは、今、生きている、死んでいる？
A：さまざまな答え
T：みんないろいろと考えてくれてありがとう。この作品の作者は、フランスの美術家、クリスチャン・ボルタンスキー。何人かがこの作品を見て「お葬式みたい」と感想を言ってくれたように、彼は「生」と「死」、そして人々の「記憶」をテーマに作品を制作しています。この写真の子どもたちが、今生きているのか、死んでしまったのか、これは明らかにされていません。しかし、ボルタンスキーさんは次のように言っています。
「これらの子どもたちがたとえ今生きているとしても、写された時の彼らの顔はもはや消え去っている。私たちは皆、私たちの内に死んだ子どもを持って歩いています。それはかつての私たち、もはや存在しない私たちです。」
みんなも家に小さいころ（赤ちゃんのころ）の写真ってあるよね。そのころの自分は、今はもうどこにもいない。今生きているとか、死んでしまった、ということとは関係なく、写真に写っていた過去の自分の姿は、現実にはもうどこにもいないということ。今日の自分は、明日にはもういないということ。そんな当たり前だけど気付かない大切なことを、ボルタンスキーさんは作品を通じて教えてくれているような気がします。


クリスチャン・ボルタンスキー
《聖遺物箱（プーリムの祭り）》1990年

出張授業セット

○美術館学習のための事前出張授業

作品ガイドボランティアによる美術館学習の支援プログラムは、ゆっくりと着実にその活動の拡充が図られていった。2000年度には、ガイドボランティアの有志による新たな学習支援の活動がスタートする。豊田市立青木小学校の図工担当の先生からの依頼を受け、ガイドボランティアが学校に招待されて美術館学習のための事前授業を受け持つことになったのである。ボランティアの方々からしてみれば、すべてが初めての経験である。この事前出張授業の実施に向けては、美術館の教育担当学芸員の指導のもと、授業案の作成と授業の進め方の検討が繰りかえし行われた。授業のねらいは、美術館学習当日に向けての動機づけにあるため、「美術館へ行ってみたい」、「実際の作品を見てみたい」という子どもたちの興味や関心を喚起することが目標となる。授業の構成は、①豊田市美術館の概要　②所蔵作品1点（あるいは2点の比較）をテーマにした対話型トーク　③所蔵作品3〜4点の鑑賞のポイント紹介　④企画展の概要とし、それぞれの内容ごとにB2サイズの写真パネルを用いながら授業を展開していくことになった。受講した子どもたちや先生の評判は上々で、この授業の評判が先生の間に口コミで広がり、2000年度は最終的に3つの小学校と2つの中学校で、2001年度は2つの小学校で出張授業が実現した。

2002年度以降は、美術館から市内すべての小学校に向けて、ボランティアによる出張授業の開催希望校を募ることになった。学校サイドは、美術館学習に対する事前指導の必要性を強く感じていた様子で、毎年15〜20校から依頼の声があがるようになったのである。

こうして美術館を訪れる日、「子どもたちは美術館へ行く日を楽しみに待っていました」と、出張授業を依頼した担当教諭らが語るように、展示作品を真剣に見つめる多くの子どもたちの姿が見受けられた。

出張授業

美術館学習のための事前出張授業指導案（平成20年度／2008年度版）

1. 目　標　　美術館学習当日に向けての動機づけを行い、「美術館へ行ってみたい」、「実際の作品を見てみたい」という子どもたちの興味や関心を喚起する。

2. 対　象　　小学4年生

3. 展　開　　（45分授業）

時間	学習活動・予想される発言など	指導上の留意点・声かけなど
5	導　入	
	○自己紹介 ○学習のめあてを確認する。	○はっきりとした口調で／大きな声で／抑揚をつけて話す。「楽しい授業」の雰囲気づくりに努める。 ○＊月＊日の美術館学習に向けての動機付けを行う。
5	豊田市美術館の概要について	
	○豊田市美術館の建築・空間について学ぶ。 ・1995年11月オープン／東海地区トップクラスの大きさ／建築家は谷口吉生さん／水平、垂直が構造の基本／外光が入る明るい展示室／数々の建築賞受賞	○美術館の建築や空間の特徴を子どもたちと一緒に捉えていくようにする。
15	クリムトとシーレの作品によるトーク＆クイズ	
	○クリムト《オイゲニア・プリマフェージの肖像》とシーレ《カール・グリュンヴァルドの肖像》を比較しながら見ていく。 2枚の絵の紹介 2枚の絵の違いは何だろう？ ・クリムトはきらびやかで装飾的／シーレは白と黒が中心で、タッチが力強い。 ・立ってる／座っている、男／女 モデルのポーズが正面／斜め　・・・等々。 二人は師弟。似ているところは？ ・筆使いが似ている（ラフなタッチ）　・・・等々。 クイズ！どっちがクリムト？どっちがシーレ？ ・クリムトとシーレの作品が4枚ずつ印刷されたプリント教材を配布する ・答え合わせ	○黒板に2枚の絵のパネルを置き、作家名（生没年）、作品名、制作年を書く。 ・オーストリア・ウィーンを代表する二人の作家によって描かれた作品。 ・二人は師弟の間柄 ○作品をよく観察して、発見したことを発表しあう。 ○二人の画家の作風や構図の特異さを発見させる。 ○互いの見方を共感的に受け止めながら、自分の見方を深めていくことができるようにする。 ○モデルの家柄や性格などを上手く描き出している点に注目させる。 ○優れたアーティストの作品は個性的！　二人の作品を見分けられるかな？ ○今度美術館に行ったら、この二人の作品をじっくり見てみよう。

クイズ！どっちがクリムト？どっちがシーレ？

出張授業

時間	学習活動・予想される発言など	指導上の留意点・声かけなど
10	**3〜4作品の鑑賞ポイント紹介**	
	☆エルンスト《子供、馬そしてヘビ》	○エルンストは夢の世界や、偶然できるカタチを作品にとりこんで、不思議な作品をつくりました。 ・タイトルの「子ども」と「馬」と「ヘビ」は、この絵の中のどこに隠れているのかな？ ・「フロッタージュ」について説明。
	☆岸田劉生《麗子像》 ・なんだか怖い、お化けみたい。	○劉生さんは麗子さんをモデルに34点の作品を制作しました。 ・この女の子は誰だろう？ ・この女の子から受ける印象は？
	☆中原浩大《無題(レゴ・モンスター)》 ・ウルトラマンの模様のように見える。	○レゴ･ブロックを使って制作した巨大な作品です。 ・レゴブロックがいくつ使ってあるのだろう？ ・この作品の裏側はどんな風になっているのか、美術館で確かめてみよう！ 本物の作品は美術館にあるので、お楽しみに
5	**来館時に開催している企画展の紹介**	
	○企画展の見所を学ぶ。	○企画展のポスター、チラシを持っていくこと。
5	**ま と め**	
	○まとめ	○美術館には、まだまだ様々な方法で、新しい美術の世界を開拓しようとした人たちの作品がたくさん展示してあります。美術館でいろんな“びっくり”を発見してください。

美術館学習のための事前出張授業の実績

2000年／平成12年度

訪問校	児童数(クラス数)	授業開催日
青木小学校	126 (4)	10月10日、11日
畝部小学校	55 (2)	10月31日
前山小学校	133 (4)	11月10日、13日
井郷中学校	138 (4)	1月22日
美里中学校	190 (5)	2月6日、9日、15日
計5校	642 (19)	

2001年／平成13年度

訪問校	児童数(クラス数)	授業開催日
前山小学校	138 (4)	10月22日、23日
青木小学校	113 (3)	10月29日
計2校	251 (7)	

2002年度／平成14年度

訪問校	児童数(クラス数)	授業開催日
若園小学校	123 (4)	4月30日
東山小学校	80 (2)	5月 2日
岩倉小学校	53 (2)	5月 7日
伊保小学校	42 (2)	5月28日
平井小学校	32 (1)	5月29日
土橋小学校	71 (2)	5月31日
藤沢小学校	7 (1)	6月 4日
駒場小学校	61 (2)	6月 4日
浄水小学校	33 (1)	6月 4日
東広瀬小学校	12 (1)	6月 6日
九久平小学校	29 (1)	6月 7日
加納小学校	43 (2)	6月13日
高嶺小学校	122 (4)	6月14日
計13校	708 (25)	

2003年度／平成15年度

訪問校	児童数(クラス数)	授業開催日
九久平小学校	38 (1)	9月 9日
挙母小学校	107 (3)	9月 9日
童子山小学校	94 (3)	9月11日
若園小学校	130 (4)	10月14日
青木小学校	122 (4)	10月20日
大林小学校	134 (4)	10月28日
浄水小学校	26 (1)	10月28日
五ヶ丘小学校	41 (1)	10月31日
広川台小学校	70 (2)	11月18日
西保見小学校	35 (1)	11月19日
井上小学校	61 (2)	11月21日
若林東小学校	76 (2)	11月27日
計12校	934 (28)	

2004年度／平成16年度

訪問校	児童数(クラス数)	授業開催日
若園小学校	138 (4)	4月30日
大林小学校	165 (5)	5月10日
衣ヶ丘小学校	87 (3)	5月11日
山之手小学校	98 (3)	5月27日
青木小学校	107 (3)	5月31日
五ヶ丘小学校	41 (2)	6月 1日
駒場小学校	61 (2)	6月 8日
美山小学校	129 (4)	6月15日
野見小学校	72 (2)	6月16日
童子山小学校	90 (3)	6月17日
西保見小学校	51 (2)	6月24日
平井小学校	56 (2)	6月25日
東広瀬小学校	22 (1)	10月 1日
計13校	1117 (36)	

2005年度／平成17年度

訪問校	児童数(クラス数)	授業開催日
明和小学校	12 (1)	10月18日
広川台小学校	52 (2)	10月19日
西保見小学校	33 (1)	10月19日
平和小学校	62 (2)	10月21日
築羽小学校	5 (1)	10月24日
畝部小学校	54 (2)	10月25日
御作小学校	15 (1)	11月15日
竹村小学校	96 (3)	11月22日
東広瀬小学校	11 (1)	11月24日
平井小学校	65 (2)	11月28日
美山小学校	146 (4)	12月 1日
則定小学校	7 (1)	12月16日
駒場小学校	89 (3)	1月11日
東山小学校	88 (3)	1月11日
土橋小小学校	63 (2)	1月12日
小清水小学校	129 (4)	1月13日
五ヶ丘小学校	26 (1)	1月24日
計17校	953 (34)	

2006年度／平成18年度

訪問校	児童数(クラス数)	授業開催日
築羽小学校	4 (1)	10月17日
敷島小学校	12 (1)	10月20日
大沼小学校	24 (1)	10月23日
西保見小学校	37 (1)	10月24日
石畳小学校	43 (2)	10月24日
寺部小学校	65 (2)	10月31日
藤沢小学校＊	16 (1)	11月13日
東広瀬小学校	17 (1)	11月21日
竹村小学校	117 (3)	11月21日
平井小学校	64 (2)	11月24日
美山小学校	120 (3)	11月30日
九久平小学校	24 (1)	12月 4日
五ヶ丘小学校	33 (1)	12月18日
童子山小学校	97 (3)	1月10日
小清水小学校	136 (4)	1月11日
末恵野小学校	103 (3)	1月12日
駒場小学校	61 (2)	1月15日
市木小学校	111 (3)	1月17日
土橋小学校	79 (2)	1月25日
四郷小学校	53 (2)	2月 8日
計20校	1216 (39)	

＊･･･学芸員が出張授業を担当

2007年度／平成19年度

とよた科学館のプラネタリウム改修工事のため、美術館学習は未実施。

2008年度／平成20年度

訪問校	児童数(クラス数)	授業開催日
明和小学校	8 (1)	12月 9日
道慈小学校	8 (1)	12月17日
大林小学校	127 (4)	1月 8日
幸海小学校	57 (2)	1月13日
市木小学校	108 (3)	1月15日
野見小学校	87 (3)	1月28日
平井小学校	78 (2)	2月 2日
石畳小学校	40 (1)	2月 3日
四郷小学校	53 (2)	2月 4日
梅坪小学校	185 (5)	2月 6日
計10校	751 (24)	

4.「美術館学習(1996年～2008年度)」の意義と課題

アートは、見ることを通して、見えないもの、形のないものに触れる媒体である。極論すれば、アートは「見る哲学」。それは、我われ人間の可能性や存在の意味について感じたり考えたりさせてくれる、不可解で深遠な存在である。だからこそ、子どもたちにアートを体験させることは大切な意味を持つ。しかし残念なことに、子どもたちの日常ではアートに関する情報を得るメディアもなければ、美術館へアクセスする交通手段も十分に持ち合わせていない。子どもたちが美術館に足を運ぶようになるには、何らかのきっかけや働きかけが必要で、それには学校教育の場が重要な役割を担っているのだ。確かに、近年の図画工作・美術科の授業では、鑑賞の重要性を謳う新しい学習指導要領の後押しも手伝って、鑑賞活動への取り組みは増えてはいる。しかし、そうした鑑賞教育を発展させるかたちで、先生が子どもたちを美術館へ連れて行きたいと希望しても、交通の便、移動の時間や費用の問題を理由に断念せざるを得ないのが現実である。また、これまで学校で実施している「校外学習」の行き先といえば、決まって社会や理科の学習内容に関連する施設であり、訪問先としての美術館の優先順位は極めて低いだろう。それゆえ、多くの児童生徒が、美術作品は教科書や資料集の中にだけ存在する自分とは無縁のものと見なし、美術館とはどんな場所なのかを知らぬまま大人になっていくのである。

こうした現状の中、豊田市において1996年度から始まった美術館学習の取り組みによって、生きたアートと子どもたちを繋ぐ道筋が整備されたことは非常に大きな意義を持つ。子どもたちはこの機会に、世界のアーティストの多様な発想と表現に出会い、自らの視野、世界を拡げることができる。また、アートにはさまざまな見方、感じ方、考え方、表現の方法があることを知り、自分とは異なる他者の存在に思いをめぐらすだろう。さらには、大人たちが大切にするアートの存在を知り、人々がマナーを守りながら真剣に作品と向き合う公共の美術館とはどんな場所なのかを知ることになる。この学習の体験がきっかけとなり、子どもたちの未知なる可能性を広げることで、長期的視野にたった生涯学習へとつなげていくことができたら素晴らしいことである。

豊田市教育委員会の要請から始まった美術館学習には、反省や課題も残った。主なものを以下に挙げてみる。

1) 美術館学習の導入決定から実施までの準備期間が短く、事前に教育委員会、学校、美術館という3つの組織の間で、美術館における鑑賞教育の意義や目的について、さらにはそれを達成するためにどのようなバックアップ態勢を整えていくのかといった基本的な話し合いの場をほとんど設けることなく、学習の実施を敢行せざるを得なかった。このため学校によっては、美術館へ行くこと自体を目的化してしまい、事前、事後指導を行わないという実態が見受けられたり、美術館側も学習の

支援プログラムの整備に立ち遅れが生じてしまった。これは大きな反省点となっている。

2）美術館を訪れた子どもたちが、より主体性を持って学習に参加できるようにするための手立てを考察することも課題のひとつである。これまで子どもたちは先導役の担任教諭に連れられて、クラス単位で館内の観覧エリアを一巡する。途中、ガイドボランティアによるギャラリートークに参加するといったプログラムが用意されてはいるが、大半はひとつの導線に沿って移動して作品を見てまわっている。そして観覧の最中、「触るな」「騒ぐな」「走るな」と何度も注意を促される。子どもたちにすれば、美術館は規制の多いだけのつまらない場所であるという印象をあたえてしまう可能性もあるだろう。これは作品保護の観点から採用された当然の対応ではあるが、事前指導を徹底させることで、個人あるいは小グループの目的にあわせて自由に美術館を探索できるようにするなど、子どもたちが高いモチベーションを持って学習に取り組めるプログラムを開発していくことを検討していきたい。

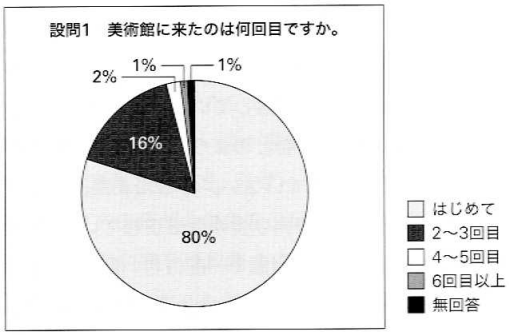
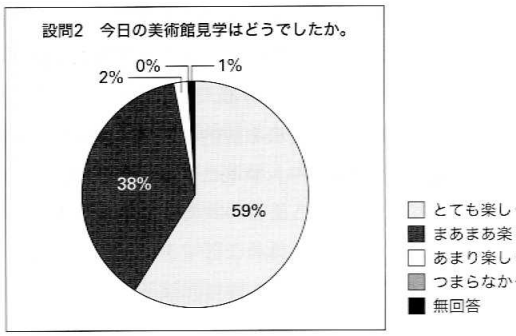
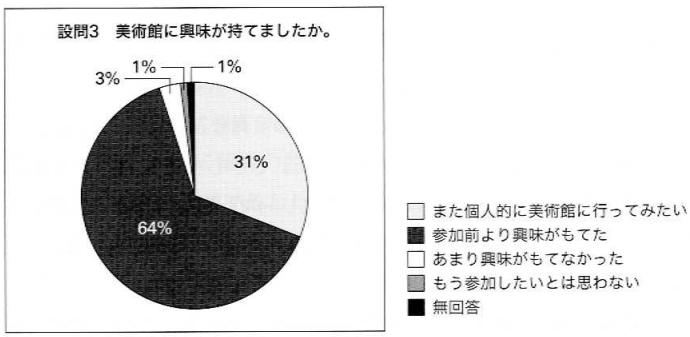
3）美術館学習を終えた後、子どもたちがこの学習をどのように受け止めたのか、残念ながら美術館は、その調査を部分的にしか行えていない。さらにまた、美術館学習に参加した子どもたちが、将来どれほどの割合で再び美術館を訪れているのか、これについても調査する方策を持っていない。近年は、当館で一般の若い観客や芸術・建築科の大学生、博物館実習生、新任教員のグループなどを対象にギャラリーツアーをしているとその参加者の中に豊田市の出身者がいて、「小中学生のときの美術館学習での体験を今でもよく覚えている」という声を聞く機会が増えているのも事実である。これまでの地道な活動によって子どもたちの内に根を張ったアートの種が、少しずつ芽吹きはじめている、そんな印象すら感じるのである。学習後の継続的な実態調査を行うのは非常に困難ではあるが、美術館学習の本質的な成果を検証し、活動の伸長・改善に取り組むためにも、今後はアンケートやモニタリングの方法についての研究も重要であると考えている。

5. おわりに

1996年度からスタートした豊田市の美術館学習は、数々の支援プログラムの拡充を図りつつ、継続事業として安定した軌道に乗っていった。2008年度には、新たに教育普及を担当する学芸員が増員され、当館学芸担当の教育普及係は2人体制となって、事業全体の推進力が大きく向上しようとしていた。しかし、2008年秋、これまでの状況を一変させる出来事が起こる。米金融危機（リーマンショック）に端を発した世界不況によって、豊田市の自動車関連企業が受けたダメージが市の財政にも大きな影響を与えたのである。こうした余波は教育行政にも降りかかり、2009年度には美術館学習のための交通費削減にともなう事業の縮小を強いられ、さらにはその

翌年度から（2010〜2011年度）は事業の中止を余儀なくされる。こうした紆余曲折を経て、2012年度、美術館学習は実施体制を大きく変えて新たなスタートをきった。この2009年度以降の美術館学習の動向については、また稿を改めて報告する予定である。

最後に、美術館学習の運営と活動に協力と支援をいただいた皆さまにお礼を申し上げます。

美術館学習アンケート

＊2003年〜2008年に美術館学習を体験した小学校25校、2,054名からの回答